【巻頭言】

優しさは怒りの中に

藍住町教育研究所長　　漆　原　都　夫

森口先生と出会って早１０年余りが過ぎました。１０年一昔と言いますが、その間に私は藍住中学校から大惣小学校、八千代中学校を経て板野中学校で教職を終わり、現職に就いています。

一方、森口先生は、藍住中学校から瀬戸中学校へ、ついで板野中学校に来られて、再び共に学び教えるようになりました。その間、彼は自分の一つの大きな『峠』を越えて、独身から２女の父親となり、仲間と共に６冊の「峠を越えて」と、自分のまとめとして２冊の「よろこび」を出し、この１０年のまとめとして、「よろこび」第３号を出すことになりました。

共に歩み、共に学んできた一人として、この巻頭のことばを書かせてもらえることは、本当によろこびであると同時に、適任かどうか、不安も感じています。

藍住中学時代、一女生徒にこんな質問を受けました。「森口先生って、どうしてあんなに同和教育に熱心なん？」一瞬、答えに戸惑った思い、おわかりいただけるでしょうか。そして、答えました。「森口先生は、同和教育だけでなく、社会科も道徳も熱心に教えてくれるだろう。１０年してみ、森口先生は県下でトップクラスの先生になるから‥‥」

１０年過ぎた今、県内だけでなく全国的にも、道徳教育・同和教育の実践と研究において、トップクラスになり、このような授業記録を公開できる先生には、全国でもお目にかかりません。

ここに書かれた１９編の授業記録のうち、半数の授業は参観し、授業記録も読んでいましたが、今回、新しく編集するに際して、校正をかねて全文読ませてもらって、改めて、教師がすばらしければ、生徒もすばらしくなる。生徒が成長すれば、教師も成長していくということを実感し、師弟同行の意味を思い、強い感動を覚え、深い感銘を受け、今更ながら、自分自身の教師として、人間として、差別解消への意欲や努力の足りなさを反省しております。

この１０年を振り返ってみますと、１９８５年～１９８６年、藍住中学校が同和教育の文部省指定を受け、荒れる中学校と言われる中で研究発表会を開いたときの授業「水平社宣言」が最初の記録です。参会者を一手に引き受けた感じの教室での熱気あふれる授業、生徒に負けないで、先生も思いのたけを語っていますし、この思いが今も持続しています。

１９８７年、瀬戸中学校にかわると、今度は道徳教育の文部省指定が待っていました。そこでの最初の研究授業が「瀬戸のかじこ」、授業を見に来いとのことで参観して、転任２カ月で、生徒と教師が共にこれだけの熱い思いが語れる授業に感嘆しました。道徳教育と同和教育の接点が見いだせたのも、この授業からだと思います。

そして、１９９０年、板野中学校で再び共に学ぶようになって取り組んだのが全体学習、物言わぬ中学生に自分の意見を発表させる一方法として、本県中学校道徳教育研究会が実践していた学習オリエンテーションを仁木先生、森口先生を中心に２年団の先生方が、一歩進めて部落問題の全体学習として創造していきました。

その最初の授業が「渋染一揆」、これで先生も生徒も自信めいたものができ、以後の実践への展望が開けたといえます。ついで１２月の「私の目をみて！」の授業、「この授業は私が大きな一歩を踏み出すきっかけとなった授業である。この授業は生涯忘れることはない」と彼が言うように、彼にとっても、以後の全体学習にとっても、大きな意義をもつ授業となっています。

私にとって忘れられないのが１９９１年度、３８年間の教職最後の年、どんな巡り合わせか、６月に板野郡同和教育研究大会、１１月に徳島県中学校同和教育研究大会と二つの大会を板野中

学校が主催することになります。今思っても、先生方も生徒の皆さんも本当によく頑張ってくれました。部落差別を始め、すべての差別解消への熱い強い願いが全学級の公開授業にあふれ、参会者の方々への強い訴えとなり、大きな感動を呼びました。

そして、その年の１０月、第２５回全日本中学校道徳教育研究大会が、１９７５年の第９回大会に続いて２度目、徳島で開催されました。私は前回は大会事務局長、今回は大会会長、森口先生は大会事務局次長として、前年から大会準備、運営に追われている中で、前回の大川雄哉先生のように、今回も体育館で特別公開授業をやろうとなって、総論賛成、授業のやり手なし。結局、森口先生と板野中学校３年Ｂ組が授業をすることになります。大会準備と平行して、生徒を鍛え、資料を探し、指導案を作っていきました。資料は、当初の「瀬戸のかじこ」から紆余曲折をへて「ナイン」へ、その中で森口先生は苦しみながらも、確かなものをつかんでいきました。

大会当日、生徒は案外緊張していないように見えましたが、私は板野中学校の生徒が、７００名をこす全国の先生方の前で、どんな学習をするか。自分の思いを自分の言葉で語れるのだろうかと不安でいっぱいでした。しかし、生徒は健気でたくましく、道徳教育・同和教育の違いなんていう理屈を乗り越えて、「人間としての生き方」について語ってくれました。６０分余り話し合って授業が終わり、万雷の拍手に送られて生徒たちが体育館から退場する姿は、今も瞼に焼きついています。「板野の子がこれだけやれた！」私の心の中にあった弱気と差別意識を見事に吹き飛ばしてくれたよろこびと感動に私は浸りました。

当日参観していただいた横山利弘文部省教科調査官（道徳担当）が「徳島県で昨年全日本中学校道徳教育研究大会が行われたときにも、私は衝撃を受けました。子どもたちがあそこまで自分を誇りに思い、友達のことを思える。何かこの子どもたちの姿に、私は人間の神々しさを見ました」と、翌年の徳島県中学校道徳教育研究大会三野大会で語ってくれました。

横山先生との出会いは、以後の道徳教育・同和教育への歩みの最良の師を得た思いです。それが１９９３年度の文部省「道徳教育推進指導資料４」に「峠」と「スダチの苗木」が入ったことで、一つの実を結んだと言えます。このことは彼が書いていますが、その営みはまさしくひたむきに人間の誠実を貫いた営みでした。

ついで、１９９４年１１月の全国同和教育研究大会徳島大会全体会の特別報告、彼の過去３５年の人生と部落解放、全体学習にかける思いのたけを４０分にまとめるには内容が豊富すぎました。しかし、それを見事にまとめ、大会当日の報告で、参会者に大きな感動を呼んだことはご承知の通りです。改めて、森口先生の人間性と文章力、迫力ある話し方に感銘を受けました。この内容と思いについても最初に書かれていますし、発表のビデオもあります。ぜひご覧ください。

この書を読んでいただければおわかりのように、森口先生の部落差別をはじめとするあらゆる差別の解消と、人がみな人間として豊かな心を持ってしあわせに生きていける社会をつくることへの熱い願いと強い意志が表されています。彼の一人一人の生徒に向ける優しい眼差しは、まさに人の憂いを知り、「優しさは怒りの中に培われる」ことを表していると言えます。

森口先生が、今後とも仲間の先生方や生徒たちと共に、こうした実践を継続発展させていかれることを期待すると同時に、一人でも多くの先生方が本書をお読みくださり、板野中学校の全体学習に参加いただいて、それぞれの地域や学校で、子どもの心を耕し、意識の変容を求めるために、全体学習なりいろいろな方法で教育実践に立ち向かっていただきたいものです。

そうすることによって、今、混迷と荒廃が叫ばれる中学校で、学校・教師不信の大きな要因となっているいじめ問題をはじめ、あらゆる差別問題が解消への道をたどり、学校が子どもにとっても、教師にとっても、明るく楽しく充実したところになると信じております。